

新古今の歌語

はじめに

私は、別稿において、王朝の歌語意識について考察した⁽¹⁾。歌語とは、否定的にしか捉えられていない、概念の空洞化された語であるが、和歌固有のレトリックを通過して異化された語である、と結論づけてみた。本稿は、これを承けつつ、新古今の歌語意識を探り、方法へどのように結び付けたか考察してみたい。

一

別稿では、歌合判詞における批評用語「歌ことば」あるいは「ただことば」の用例を検討することから、解きほぐそうとしてみた。ここでも、それを承けて、主に新古今期に、歌語とは、どのように捉えられているか、まず、検証してみたい。

かぎりあればこよひもすでにふけにけりくれがたかりしはるの
日数の(雅経)

…右歌、こよひもすでにといへる已の字、そのよせなくては
ただ詞にやきこえ侍らん、

〔千五百番歌合〕二百九十四番右、俊成判詞〕
という判詞が注目される。「すでに」の用語が「ただ詞」であるという批判であるが、「すでに」のことばそのものが「ただ詞」であると

紙 宏 行

いうわけではなく、「すでに」が、「よせ」を欠いていることで、用語としての必然性が見られず、結果的に「ただ詞」になってしまふという判詞である。俊成は、「よせ」を有することが、歌における用語には必要であったのであった。

このように、詠歌において、「よせ」は早くから重視されていて、むらさきにはほふふじなみうちはへてまつにぞちよのいろはかかれる(朝忠)

みづなくてふじなみといふことは、ふるきうたにはをりをりあり、されど、たづぬる人なければ、とどまれるなるべし、うたあはせにはいかあらん、ことによせぬはあるまじ、いはれなし、なほ、みづ、いけ、きしなどぞよすべかりける、歌がらはきよげなり、

〔内裏歌合天徳四年〕藤九番左、左大臣判〕
の例は、「ふじなみ」のことばは、古くから用例があるにもかかわらず、「よせ」がないことを指摘したものである。歌一首のことばを「よせ」あることばによって統一してゆく詠歌の方法が求められたのである。

「よせ」とは、通常、いわゆる縁語をさすものと考えられている。片桐洋一氏が、「古典和歌の中核というべき三代集和歌の表現上の特色を一口に言えば、縁語の駆使ということに尽きると私は思う」と

述べているように、縁語というのは、三代集時代から既に、和歌詠作の方法の中核をなしていた。「腰折れ」というのも、俊成が、「和歌に有称腰折事者、中五字与下七七離別せるを謂ふなり」(『六百番歌合』若草廿一番判詞)と説明しているように、掛詞や縁語による各句の連結の欠如を指摘することはであるが、既に『源氏物語』や『更級日記』にも見られる。そこには、実例はあげておらず実態はわからないが、縁語を用いた詠歌の方法は、広く意識されていたのである。それが、行き過ぎになることもあって、『新撰髓脳』にも「事おほく添へくさりてやと見ゆるが、いとわろきなり。一すちにすくよかによむべき」と戒められてさえている。

しかし、そのことと、冒頭に引いた『千五百番歌合』判詞の批判と違うのは、歌一首の中に互いに縁語関係のあることはを配すべきことを問題にするのと、歌中の他のことばと縁語関係のないことばをそのまま「ただ詞」であると名付けてしまふという意識のありかたである。歌一首をどう構成するかの問題ではなく、歌の用語の不適切性を歌語か否かという、ことばの問題としてとりあげてゆくということばの思想のレベルの懸隔といつてもよい。ことばそのものを、鋭く対象化しているのである。

同様の意識は次の判詞にも認めることができる。

月を見てしばし思ひも忘れき昼間ぞ恋のなぐさめはなき(季経)

…「昼間」、寄り所無き上に、初五文字事足らず聞こゆ。

(『六百番歌合』昼恋・十六番左、俊成判)

「昼間」のことばに「寄り所」がないという難である。

このことは、さらに、次のような、「歌詞」「ただことば」を批評基準とする判詞にも適用することができる。

小萩原花咲きにけり今年だにしがらむ鹿にいかで知らせじ(源

雅兼)

…「今年だに」といへる腰の文字も、歌詞とは聞こえず。

(『元永二年内大臣忠通歌合』草花・二番左、頭季判)
あやなしなたぶさにすずをとりながらおもふころのかつみだ
らむ(寂念)

左歌、おもふころのかつみだらむといへるすゑの句いとよろしくこそ待るめれ、ただし、たぶさにすずをといへるこそ、すずはこゑにいふなり、ただことばにやきこゆらむ、

(『住吉社歌合』述懐廿五番左、俊成判)
「今年だに」や「たぶさにすずを」(特に「すず」という句そのものは、「歌詞」ではない、「ただことば」であるというわけでは決してなく、むしろ、他の歌には、多くの用語を数え上げることができ。前者は、題は草花。「小萩原」「花」「しがらむ」「鹿」などのことばは、題と対応しつつ、各ことばが、相互に関連性のあることばである。その中であって、「今年だに」の語だけが、他の語句との関連性がなく、浮いた感じになっているという。この判詞では、その点について「歌詞とは聞こえず」と「歌詞」の用語によって批判したのである。後者の判詞は明解で、「すず」は「こゑ」と縁語関係にあるが、「たぶさ」とは「よせ」がなく、したがって、「ただことば」に聞こえるという。「歌詞」「ただことば」の批評用語は、「よせ」の有無を問題とする、批評概念となった。

二

「よせ」とは、ここまで縁語を意味する語としてきたが、それにとまらぬ意味の広がりを持つもののようにである。

「よせあり」と評した、肯定的な判詞をとりあげてみると、
すみのえのこほりとみゆる月かげにとけやしぬらむかみのここ

ろも(公重)

左、こほりとみゆるといひて、とけやしぬらむといへることばは、よせあるやうなれど、

(『住吉社歌合』 社頭月九番左、俊成判)
この例は、「水」と「とけ(解く)」とを縁語関係にあるものと見た判詞で、「よせ」は、縁語と同義として用いられており、わかりやすい。ところが、

雲わけし谷のこずゑもふる雪のそこのみなる天のかご山(平中納言)

左、雲わけしとおき、天のかご山といへるよせありてきこゆるを、

(『民部卿家歌合』 深雪二番左、俊成判)

という判詞では、「雲わけし」と「天のかご山」との関係は「よせ」と判断したものであり、これは、ただちに、通常の縁語関係にあるとはいえないだろう。「天のかご山(天の香具山)」について『八雲御抄』「名所部」に、「あまの石戸をおしひらきたまふ所なり。かご山とも。久方の一。わすれ草。霞。雲。衣ほす。神鏡奉鑄所也。みねのまさかき。俊成歌也。あまのかご山はあまりにたかくて、それのかのかげくるによりていふと、日本紀二見えたりと云り」と、「天のかご山」に関する故実・由縁や、関連することばを解説している。「天のかご山」から「雲」「雲わけし」へのことばの連鎖は、このような歌学書にまとめられるまでに、体系化され定着していたのであり、このようなことばの連鎖を「よせ」と呼んだものである。この歌におけることばの連鎖は、「天のかご山」と「雲わけし」とのことばの連鎖ばかりでなく、他のことばとの連鎖もあるのに注意しておきたい。「雲わけし」のことばは、「霞」や「衣ほす」という春夏の季節を指し示したことばを縁語関係から連想することによつ

て(特に過去の助動詞「し(き)」を用いていること)生きてくる表現であるし、「天のかご山」が「雲わけし谷のこずゑもふる雪のそこに見えるという壮大な感覚は、「あまの石戸をおしひらきたまふ所」などという「天のかご山」の神話的なイメージに基づいた発想であると思われる。「天のかご山」ということばは、『八雲御抄』の記述でいえば、「霞」や「衣ほす」、「あまの石戸をおしひらきたまふ所」などという、歌の表面に見えないことばとも連鎖関係を持っていると考えるべきである。この平中納言の「雲わけし」の歌の蒼古な雰囲気は、このようなことばの連鎖によつて醸成されている。

歌のことばは、歌に表現されていない、見えないことばとも連鎖関係を持っている。新古今の歌は、そのような範疇的なことばの連鎖をふまえて構成されている。歌の表現に見えることばが相互に、また、歌に見えない、隠れたことばとも響き合い、歌のことばの総体として、一首の歌が形成されているのである。

清輔の『和歌初学抄』は、「古き詞のやさしさからむを選びてなびやかにつづくべきなり」と歌の用語について注意したあと、初学向けに歌語の一覧を示している。それらは、ひとつの歌語を標目に、下にその「よせ」を列記するという形式をとっている。「古き詞のやさしさからむを」というように、それらは和歌表現の伝統に基づいて拾われているというまでもない。たとえば、「秀句」の項目に、
天によせては、月、日、ほし、くも、あまのはら、あまのがは、
などいふべし。

月 ヒカリ サス クマナシ サヤケシ アカシ イヅ カツ
ラ オボロ イル オツ カゲ クモル

などとあり、「似物」の項目下には、
月はひるににす。霜 雪 水 鏡

露は玉 螢

などと記されている。ことばは、結び付き、連鎖し合つて、ひとつの体系を形成しているかのようである。逆にいえば、それぞれの歌語が全体の体系の中に確実に位置づけられているのである。ひとつのことばを起点に、次から次へとことばがたぐりよせられる。現実世界の何物をも前提とせず、和歌表現の伝統を基盤にして、歌語の体系は、閉じられ、自立した。

三

以上のような、ことばを批評の対象とする判詞の積み重ねを経て、歌語の体系をふまえ、和歌の用語について、定家は次のように述べている。

ききわかぬ木の葉は庭の時雨にて鹿のねすさむ長月の暮(保季)
木の葉は庭の時雨にてとおきては、そのすぢの心、詞のよせ
などしにもあらまほしくや侍らむ、すさむといふ詞、古くき
きならずや侍らむ、三代集に入らぬ歌は本歌とせずなどた
て申す人も侍れど、それはさるべきことにも侍らず、うちき
くにをかしき歌はかならず集にいれらむにもより侍らじ、詞
は古くよめる詞のよしあるをおきて、はじめてこのみよまむ
こともかつはとさにより、ことにしたがふべくや侍らむ、

(『千五百番歌合』七百九十一番左、定家判詞)

基本的には、上句に対して、下句に「そのすぢの心、詞のよせ」が欠落していて、特に、「すさむ」の語が「古くききならず」というべき語である、という批判である。さらにそこから、論述を展開して、和歌の用語のあるべき一般論を述べていく。範囲はあえて限定せず、歌に用いるべきことばは「古くよめる詞のよしある」ことばであるという結論であるが、文脈からさかのぼって考え合わせると、その特質は「よせ」のあることばなのであった。

「詞は古くよめる詞のよしあるをおきて」という発言は、『近代秀歌』の「詞は古きをしたひ、心は新しきを求め」という定家歌論の原理を表す、詠歌における用語の規範を述べた部分と、ほぼ一致した内容であることに注意したい。新古今の方法の基盤には、「古き詞」の、和歌伝統の蓄積によって形成された「詞のよせ」を持つことへの認識があったことを読み取るべきである。

『近代秀歌』は、右の記述に続けて、本歌取はじめ新古今の方法について論述してゆく。歌語の「よせ」と新古今の方法とが、どのように接続しているのか、必ずしも明確ではない。歌語の「よせ」の表現機能については、当時の歌論書などからの明解な証言が見あたらない。『詠歌一体』の「歌にはよせあるがよきこと」という記述を見ても、例を挙げ、乱用を戒めても、結論としては、「ことにより、様にしたがふべきなり」という常識的な線に落ち着いている。

稿者は、新古今の最も基本となる方法を「詞のつづけがら」の方法であると考えてみたことがあるが、「詞のつづけがら」の方法の基盤に、歌語の「よせ」を持つ特質への認識があったと結びつけるのは可能であろう。「詞は古きをしたひ」とは、歌語の「よせ」の機能を方法的に意識化し、活性化させてことばを配列することであったということができる。「よせ」ある古きことばによって、新しい心を生成しえた。歌語そのものを対象化し、その特性の認識を基盤としてのみ、新古今の方法はありえたのである。

藤平春男氏は、俊成歌論を精細に検討し、「韻律の流れとともに感性に訴えきたる美的気分こそ、和歌の本質を成すものとしたのである」と述べつつ、ことばに関しては「詩的言語の機能、すなわち韻律と映像の指摘があり、そこに和歌の本質を見いだしているのである」と述べている。韻律から感性に訴え美的気分を感得させる根拠となるもの、すなわち、「詩的言語の機能」の実質を、本稿では問お

うとしているのだが、それは、ことばの「よせ」の機能であると考えられる。

これとは別に、江湖山恒明氏は、国語学的立場から、中古の縁語と区別しつつ、定家の縁語を「有心の序」に對して「有心の縁語」と呼び、「縁語の持つ象徴的效果は、むしろ連想というはたらきに目をつけて説明すべきもの」としたうえで、「連想で『文』の脈絡をたどることによって生み出される表現効果は、(中略)作品に余情の効果を生ぜしめるものである」と結論づけた。⁽⁵⁾

尼ヶ崎彬氏は、構造主義的な立場から、縁語によって「複数の意味の圏域を縫い合わせ」そのオーバラップの中に私たちはある種の映像や諧調を読みとるのである」と述べている。方法論の理論的厳正さによって、藤平、江湖山両氏の所論をみごとに整理し、深めたという印象である。

俊成の強い余情への志向に藤平氏の右の所論を勘案すると、江湖山恒明氏の「余情の効果を生ぜしめる」という結論につながっていく。新古今の方法の基盤には、ことばへの自覚があり、志向した理念が、余情であるのだから、余情形成にことばの「よせ」が重要な機能を持っていることを十分に意識していたのであろう。⁽⁷⁾

四

時代が下るが、いわゆる中世歌学に「縁の詞」「縁の字」という説がある。

歌のむねこしすそといひ、また縁の詞といふは、

春の田にすきいりぬべき翁かなかの水口に水を入れればや

春の田といへば、すき入りと縁をあらせ、水口といひつれば、

水を入れればやと縁をあらす。かやうの事を縁の字とも、上下ともいふなり。むねこしすそは、初の五七にわたるあひをばむね

と名づけ、次の五七にわたるあひをばこしといひ、終りの七々にわたるあひをばすそといふなり。この三所に縁の字を置かずは歌といふべからず。ことさらに腰に縁字をすゑざるをば、腰折れと名づけて捨つるものなり。むねすそはおのづから縁なけれども、腰に縁あれば、ひとふし歌とこそいはるれども、歌の名をば得たり。また、ただごと歌には、上下の縁の字をばすゑず。詞の縁あるをつづくるなり。この旨を心得ぬれば、歌を知るものにはなりぬるものなり。歌の面白からざらむは心のとが、やさしからざらむは、種性の生まれつきものうらみなるべし。歌をばやく詠まむ故実には、題につきて縁をいそぎ求めて、むねこしすそに据ゑ、よからむをさきとして、中をも、上をも、すそをもつくりておくべし。

(『和歌肝要』)

ほかに、『和歌大綱』『悦目抄』などにも見られる、鎌倉末期には、ポピュラーな説のようである。各句の相互間に縁語という詞の連鎖を置いて、一首の統一をはかる必要性を説いたものである。これは、鎌倉末期に起こった説というわけではなく、本稿でとりあげた、詞の「よせ」を重視する歌合判詞群にもあてはまり、逆に、平安中期以来の歌合判詞を集成し、体系化したような説であると位置づけることができる。初句から末句まで詞の縁によって一首を統一するというのは、一般的な詠法であったとみるべきである。引用文中の「腰折れ」というのは、『源氏物語』や『更級日記』における用例については前にふれたとおりである。

また、速詠の故実を説く部分では、与えられた題からひとつの歌語へ、さらに一首の歌へと、詞の縁による連鎖によって継次的にことばが紡ぎ出され、一首の歌を形成してゆくようすが、如実に示されている。尼ヶ崎彬氏も、この記述に着目し(ただし、『悦目抄』の

文章を引用)、「掛詞や縁語をまず着想し、それを土台に歌を組み立てていこうとする」詠作方法であると述べている。題詠の実際的な詠法が、ただちに縁語を用いての詠法として述べられているが、そのことは、歌語の縁語による連鎖への自覚が、題詠によってもたらされたということを示している。個々の歌語の体系的把握、歌語全体の体系化にも、題詠は重要な契機をなしているのである。

へ注

(1) 拙稿「歌語に関する試考」(『菊田茂男教授退官記念日本文芸の潮流』平5・4)

(2) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』(昭58・12)の「概説」

(3) 拙稿「詞のつづけがら——新古今の表現構造——」(『文芸研究』121集、平1・5)

(4) 藤平春男『新古今歌風の形成』(昭44・1)

(5) 江湖山恒明『国語表現論——文芸作品の表現研究——』(昭30・11)

(6) 尼ヶ崎彬『日本のレトリック』(昭63・1)

(7) いったい、「よせ」(縁語)の表現機能は、新古今期に限らず、今もなお明らかにはされていないといえるかもしれない。

岡崎義恵氏は、縁語には「隸属的の譬喩・形容詞、或は無意識の附加・裝飾等を先づ孤立の觀念系列として主想より切りはなし、さうして改めてこれを主観的気分の象徴たらしめる効果がある」と述べている(『日本詩歌の象徴精神 古代篇』岡崎義恵著作選、昭45・6)。

また、鈴木日出夫氏は、「事物現象を表す言葉としての縁語群がたがいに、有機的に作用しあいつつ、作者の心情ならざる外界物象がそれじたいにおいて完結したかたちとして定位せしめられている」と述べ、掛詞とともに「虚構の方法の発達の一環として位置づけ」

て、その底流にある、人間の「人間というものの限界につきあたった、宿命的・運命的な認識」までも透視しようとしている(『古代和歌史論』平2・10)。

ほかにも、谷山茂『平家の歌人たち』(著作集六、昭59・11)には、縁語の表現効果に関して「前後の親近性を保ち、風趣を添え」「含みのある表現をもたらす」と記されている。

目につくところは以上にとどまるが、それぞれの先学の問題意識の所在の相違により、さまざまに論が展開されていて、興味はつきない。それぞれ、何らかの表現効果を見とけようとしているのだが、それにどのような意味を見いだすかという相違である。